



《ヒーロー・6》油彩 50S
第48回昭和会展松村謙三特別賞受賞作品
「広田稔先生への、言葉では言い表せない感謝の気持ちを込めた、お手紙のような作品です」

——特別賞は、その名の通り毎回あるものではないかもしれませんが、今回、佐藤さんが2人目の授賞対象に選ばれました。審査ではどんな印象をお持ちになりましたか。

松村 彼の絵を見て、一目で「これは自分で買い上げよう」と思いましたね。松村謙三賞の受賞作はオープン予定の美術館に飾る予定だけど、佐藤君のこの作品も美術館に飾りたいと思った。そう思っていたところ、審査で最終的に4作品が残ったなかこの作品もありました。本当に僅差で松村謙三賞は逃してしまつたから惜しいなと思つた。19人の審査員を前に松村謙三特別賞を提案したところ、満場一致で受賞となりました。グランプリ級の快挙です。

南 松村謙三賞とはわずかな差でした。でもそれで終わりじゃなくて、特別賞が贈られた。これを受賞したことは、大きいですよ。今日ここで彼のポートフォリオを見ると、初期からテクニクをもっていたことや、それまでもずいぶんいろんな要素と変遷があつたことがわかります。特別賞として取り上げられることで、そういった1点2点の作品からは見えないような背景が、多くの人の知るところになる。それは作家にとって大きなことですよね。一点の作品に魅力があるのはもちろんだけど、こうして取り上げられて過去まで遡って見られることも大事なんです。

佐藤 昭和会展は若手にとってトップのコンクールです。実は1年前にも出品したんですが、予選で落ちました。その頃は、画家というのは画商さんに知ってもらわなきゃいけないものだと思つ



第48回昭和会展松村謙三特別賞受賞作品《ヒーロー6》の前で。
前列左から洋画家・中山忠彦、受賞者の佐藤陽也、プリヴェ企業再生グループ社長・松村謙三、
後列左から美術評論家・南島宏、日動画廊副社長・長谷川智恵子の各氏

巨匠への第二步

昭和会展・最新世代の魅力——⑦

撮影：安達康介
本文構成：丸山かおり
取材協力：すし善銀座店

第48回展

「松村謙三特別賞」

佐藤陽也

昭和会展の歴史で2度目の「松村謙三特別賞」に輝いたのは、大学の経営学部を卒業し、絵の道に進んでまだ4年余りという佐藤陽也の《ヒーロー・6》。

松村謙三特別賞をきっかけに注目され、白日会でも会友奨励賞と損保ジャック美術財団賞も受賞した若き画家を囲んで「同が作品の魅力を語る。そのスビーディーな道のり、そして師匠への畏敬の念を晴れやかに語る声に耳を傾けた。」

【ホスト】

松村謙三（プリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター招聘教授）

中山忠彦（洋画家・日本芸術院会員）

南島宏（美術評論家・女子美術大学教授）

長谷川智恵子（日動画廊副社長）

ていたの、ひとりで画廊をまわって営業したりしていました。

去年落選した作品は、写真を見てそのかたちを転写するように制作していたので、内心違和感のある、うしろめたい、恥ずかしい絵です。その後、白日会に所属する洋画家の広田稔先生と出会う機会を頂き、先生が共同で主宰する「アトリエ21」にも参加させて頂くようになりました。勉強中なので、今回は出品するまいとも思っていたんです。でもやっぱり1年前の悔しさが残っていたので、思い切って再チャレンジしました。自分もこの1年で変わりました。絵を描くこともしゃべることも、ここ1年で少しずつ本音で表現できるようになって、自分がいま好きなことをやっている、という気持ちでいられます。絵画に限らず、悪気がなくても人に迷惑がかかることがあるんじゃないかと考える癖があったんですが、今は「隠してもボロは出るだろう」と聞き直れたんです。そのせいかどうかは分かりませんが、こんな素晴らしい賞を頂けました。

——今年、白日展でも、損保ジャパン美術財団賞と会友奨励賞を受賞したそうですね。
佐藤 はい。自分の作品が入口の垂れ幕の隣に見つけたときは、泣いちゃいそうになりました。

——今年、白日展でも、損保ジャパン美術財団賞と会友奨励賞を受賞したそうですね。
佐藤 はい。自分の作品が入口の垂れ幕の隣に見つけたときは、泣いちゃいそうになりました。

——今年、白日展でも、損保ジャパン美術財団賞と会友奨励賞を受賞したそうですね。
佐藤 はい。自分の作品が入口の垂れ幕の隣に見つけたときは、泣いちゃいそうになりました。



まつむら・けんぞう
プリヴェ企業再生グループ株式会社代表取締役社長。他に大阪大学法科大学院招聘教授。大阪大学知的財産センター招聘教授、経済同友会経済・金融委員会委員も。今秋、「松村謙三美術館」を清里にオープン予定。

君みたいになら自分がいとおもったたらどんどん進むべき。
判断力と行動力を併せ持った人が
自分を創っていけるんだよ。

——松村謙三

いろんなことから逃げてきた人生。

それを象徴してくれたのが絵画であり、
憧れの画家の存在です。——佐藤陽也



さとう・ゆうや
1981年福島県生まれ。2008年明治大学経営学部会計学科卒業。10年第86回白日会展初入選(以後毎年)。12年第44回神奈川白日会展Gallery ARK賞。13年FIELD OF NOW 2013出品。第89回白日会展損保ジャパン美術財団賞。会友奨励賞。準会員推挙。現在、白日会展会員

中山 イの一番に並んでいましたよ。(笑)
佐藤君は、広田稔さんの薫陶をしっかりと受けていますね。すでに4000枚も5000枚もデッサンを描いています。この収録のために広田君に電話をかけて佐藤君のことを聞いてみました。絶対に手を抜くな、ちよつとでも手を抜いたらメンバーから外してしまうと言っているそうですね。佐藤君がこれだけのデッサンを描くのも、広田さんのデッサンへのこだわりの影響でしょうね。
佐藤 はい、広田先生ご自身が、信じられないくらいたくさん描かれます。
中山 毎日それだけの数のデッサンをさせる「アトリエ21」というグループは、日本、いや世界的

松村 最終選考で、山内君の作品と佐藤君の作品が壁に並んでかかっているのを見たときには、まさか同じ白日会だとは思わなかったよ。
中山 白日会といえば細密画と思っっている方が、実際に白日展をご覧になると、作風に幅があることに驚かれるんですよ。そんな幅の広い白日会の中でも、佐藤君は独特なんです。絵の中に独自の遠近感覚というか、自分自身の構図法を持っていますからね。少なくとも私はこんな遠近法は見たことがない。本人の印象よりも、絵の記憶の方がはっきりしていたくらいです。

——絵を描く上で、広田稔さん、そして白日会は佐藤さんにとって大きな存在のようですね。そもその出会いは？
佐藤 大学進学のために上京した頃、平澤篤先生の作品を初めて生で見る機会があったんです。平澤篤という存在は知っていたんですが、その作品に描かれた少女がとても可愛かった。略歴を見た「白日会」と書いてある。それが公募団体だということも知らなかったんですが、意識には残っていました。

それから10年くらい経って、広田先生の画集に出会って作品に引き込まれてしまったんです。僕は高校卒業を境にいろんなことから逃げてきた人



《ヒーロー》100S
第89回白日会展 損保ジャパン美術財団賞、会友奨励賞受賞作品
「《ヒーロー・6》と同様に、システナー礼拝堂のミケランジェロ・最後の審判にとっても影響を受け、描いた作品です」



《羽ばたくように、輝きますように》F100号 2010年
「写真を転写して描いていた頃の作品です、サイズが大きくなるにつれ形が取れなくなることへの苛立ちや、生で人体を描くことが全くできない情けなさに憂鬱な日々でした」



《コミュニティ》S50号 2009年
「油絵具を購入して制作した最初の作品です。コミュニティで生きる難しさ、礼節、思いやり、自分を縛る自分、言葉にならない想いの一部分です」

間ですが、逃げなかった人に比べると自分が幸せに思えた。そうすると恨まれてるんじゃないかと考えて、後ろめたくなってしまうんですけどね。
そのとき、広田先生の画集を見て「あ、僕よりも何千倍も幸せな人を見つけた」と思って救われたんです。その画集にも「白日会」という文字があつて、「ああ白日会ってすごいんだ」と知って、いろいろ調べました。自分が挑戦していいものかどうか分からなかったんですが、どうしても広田先生に会いたくなっちゃったんです。ストーリーかみだりだつてよく言われるんですが(笑)。

ただアトリエにお邪魔してご挨拶するだけだと格好悪いなと思ったので、「これだけ憧れているんだから、僕の作品を見て『ちよつと気になる奴がいるな』というくらいに思われたら光栄だなあ」と考えたんです。それが27歳か28歳のときです。大学を卒業して田舎に帰ったものの、3ヶ月経たずにまた飛び出しました。

長谷川 4人兄妹の一人息子、しかもご実家は農家でいらっしやる。美術大学にいらっしやったわ

白日会の中でも、佐藤君は独特。

絵の中に独自の遠近感覚、

自分自身の構図法を持っていますからね。

——中山忠彦



《隠せない気持ち》2010年 F50号
「白日会展で初入選を戴いた作品です。お嫁に行く姉、思い出の写真に母がこぼした笑顔、僕自身の感謝の気持ちを込めました」



なかやま・ただひこ
洋画家、日本芸術院会員、日展理事長、白日会会長。1935年福岡県生まれ。高校卒業後上京、伊藤清永に入門。54年日展入選。58年白日会会員。65年の結婚以来、良江夫人をモデルにして描き続ける。

けでもないのに急に絵の道を選ばれたんですから、反対されたんじゃないですか。

佐藤 母だけは理解してくれました。広田先生の隣で絵を描いていられるというだけで、夢が叶っちゃったという気持ちで、一生こうして描いていたら幸せだなあと考えていたら賞までいただけることになって……こんないいことがあったので、逃げだしてきた実家にも言わずにはいられなくて報告したら「あきらめて戻ってくるもんだと思っていたのに」とガツカリしたように複雑な感じでした。祝ってくれました。これならもつと早く連絡すればよかったと思いました。

南島 彼の絵は、いわゆる美術大学出身者の描く「見慣れた絵」ではないんですね。その理由は、先ほど中山先生が触られたように独特な遠近感、そして描きすぎているという感覚ではないでしょうか。我々が彼の作品から一番享受すべきところは、何も描かれていない部分かもしれない。

その空間への引き込まれ方が、見ている人を絵の向こうにある世界を予感させる。そしてそのとき、誘い込まれた絵の中のさまざまなモチーフが非常にうまく機能している、というしかけになっています。人のおしりの窪みとか、おもしろい角度から描く身体の描写は、一見素人っぽいともいえるけど、そこに作家の無意識のオリジナリティが示されている。それをどこまで深めながら堅持しているかが、ポイントでしょうね。

松村 彼は大きな絵を描けるでしょう！

中山 この子は大きな絵が描ける。でもどうして松村さんはそう思われるんですか？

松村 この場所、この店のこの壁には何枚も絵を飾ってきたけれど、彼の作品は額におさまらないで額を飛び出して出てくる感じがする。だから、「ああこの子は大きな絵が描けるんだらうなあ」と思ったんです、見た感じですね。彼自身の内面にそういうエネルギーがあるからじゃないかな。

佐藤 ありがとうございます。

南島 絵を描くということは、描きたいことが画面からどんどんはみ出ていくという欲望を、それを規定の号数に収めるかのように、今度は何をそこから消していくかを考えて折り合いをつけていく作業だと思っただけです。彼はまだその到達点にたどり着く前に抑えて遠慮して、今の大きさの中に絵画を収めている。だからどこかで勇気を出して、大作を描かなければならないときがくるでしょうね。

——今回特別賞を受賞した《ヒーロー・6》は、シリーズの中の一点ですね。



《楽描》M30号 2011年
「なんで絵を描いているの?の問い……楽しいから。この作品以降、頭の中の現実を少しでも表現できたいなと思うようになりました」

《ヒーロー・1》S30号 2012年
「憧れつづけた広田稔先生と同じ空間、手汗まみれの鉛筆、初めてのクロッキー、ムービング……描けないもどかしさ、ついていけないムービングのかたち……ぐちゃぐちゃになった僕の頭とクロッキー帳、ぐちゃぐちゃな画面から見えてきたかたち、上から俯瞰したような視点や下から覗き込んだような視点、興奮しました。ヒーロー・2とともに初めてのイメージの作品です」



くDという文字を入れることで、「背中をずっと見続けたいです、よろしくお願います」っていう気持ちがあるかなあと描いてみました。(笑)

南島 それは広田先生へのラブレターですね(笑)。広田先生の言葉で印象的なこととってありますか？

佐藤 ブランカーシが芸術家に必要な3つの要素について「神のように創造し、王のように命令し、奴隷のように働く」というのを引き合いに出されて、「お前には王様がいないね」と言われたことが印象に残っています。僕には、描きたいと思ったことを描くと、誰かの迷惑になるんじゃないかと考えてしまう悪い癖があるので、「創造したことをそのまま、奴隷に働かせるような王様になることが必要だ」と仰いました。ハートを強くしなさい、ということだと思えます。

——中山先生は伊藤清永の門下ですが、何か印象

佐藤 母を描いた作品を見て、「優しそうな母ちゃんだね。曲を作りたくなつた」とプライベートで曲を作ってくださったミュージシャンの方がいました。僕は彼の「ヒーロー」という曲に惹かれました。それを聴いたとき、自分にとってのヒーローって誰かと考えたら、やっぱり広田先生だと思っただけです。

ドラマとダンスとドローイングが一体となった「本能寺のD」というイベントを広田先生がなさることになんて、この絵では想像の空間に大き

彼の絵は、いわゆる美術大学出身者の描く

「見慣れた絵」ではない。空間が絵の向こうにある

世界へと誘い込んでくれる。——南島宏



みなみしま・ひろし
美術評論家。第53回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事等を歴任。現在、女子美術大学教授。1957年長野県生まれ。

佐藤 もともとクロッキーのトレーニングで20分、10分で描くところ、先ほどお話しした「本能寺のD」に向け、広田先生は4分、2分、1分、最後には動いている人をクロッキーするというトレーニングをなさっていた。僕もその機会を与えていただきました。

手しか追いかかれずにいると、残りの部分は

エイリアンみたいになっちゃあう、というような具合です。でも、手から描いて、顔から描いて、足から描いて……とやっている、いつの間にか真正面から描いているのに「上から俯瞰したかたち」や「下から上を覗き込んで見ているようなかたち」になって面白かったんです。それをこの《ヒーロー・6》として描いたんです。

昭和会展の予選を通過したとき、広田先生が、「面白いじゃない。イタリアにちよつと行っておいで。バチカンでシステイナ礼拝堂でも見ておいで」と言われました。何のことも分からなかったんですけど、すぐに飛行機に乗って行って見えたんです。システイナ礼拝堂に入って、巨大な天井画と礼拝堂正面にある壁画《最後の審判》を見たときに、「あ！これは！」と圧倒されて言葉が出なかったほどです。静まり返った厳かな空気の中で、「僕はこんな絵描きになりたいのかな」と自問しました。

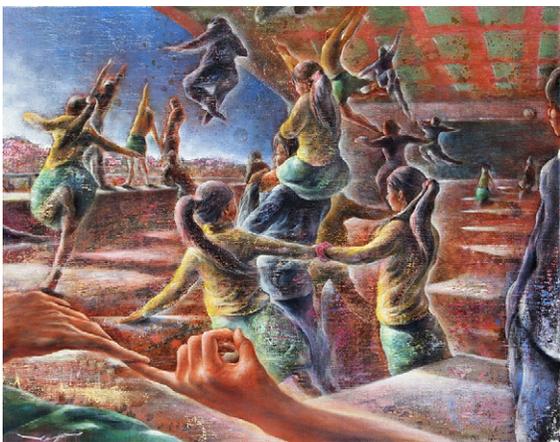
長谷川 それはすごくわかります。フレスコ画の、システイナの色に近いものを確かに佐藤さんの絵に感じますね！ これまでは模索する時間が長かったんですけど、この作品以降は構成が生き生きと、ひとつ抜けた感じがしますね。

中山 「バチカンに行つてこいよ」というような、若い画家の背中を押す言葉はとても重要です。あとは、教わる側の資質の問題。何を聞いても、行動しない、感じない、わからない、という子もいますから。私たちの時代は「行つてこいよ」と言われても、行けなかったけど、いまは誰でも行ける時代ですもんね。

「最近美大の生徒は全然デッサンをしなくなつた」と嘆いていた。モップを立てて現代美術と言ってみる、ばかりではね。あ、そんな作品を作っている人がいたらすみません（笑）。とにかく私が言いたいのは、あなたは自分で判断する基準を持つてるといふこと。だからこそ、絵にどんな見ごたえが出てきていると思う。

私の基準は簡単。「自分が買いたいのか、飾りたいか」と思うものに票を入れるだけ。今度の場合は、ほんの僅差だったから、何も賞無しではないかん、ということになって特別賞が出た。それはもう僕だけの判断ではなくて、審査員全体の総意になったんだと思う。

佐藤 ありがとうございます。普段は「次に何を描こうかなあ、描けるかなあ」と妄想ばかりし



《青い春・2》 P10号 2013年
「学級崩壊の中学時代、好きな絵から逃げた学生時代、遅れてきた青春に今幸せを感じています。憧れだった青春を描きました」

佐藤さんは、試行錯誤して今ひとつの場所に行き着こうとしています。ハンデイクヤップを、デッサンを繰り返すことで克服しているようです。——長谷川智恵子

日本洋画協会理事をつとめたほか、95年多年の日仏交流が評価され、フランス政府よりレジオン・ドヌール・シュヴァリエ勲章を受章。「気品磨き」などの著書多数。



南 そもそもどうして絵を描きたいと思ったの？

佐藤 小さい頃よく落書きはしてたんですけど、美術大学を受験する勇氣はありませんでした。実力は自分でわかっていたので、好きなことで否定されたら、僕には何も残らないと怖かったんです。今思うと、それは皆同じで当たり前のことなんですけど、僕は異常なくらい臆病でした。好きなことからも逃げてしまつたんです。

南 もしかしたら、芸術家というのは、怯え続けてる存在かもしれない。

中山 そうですね。哲学者・山元一郎の『ミケランジェロの怖れ』の中に、「ミケランジェロは逃亡者であった」という記述が出てきますが、かのミケランジェロでさえ怖くて怖くて仕方なかったんだらうと思いますね。

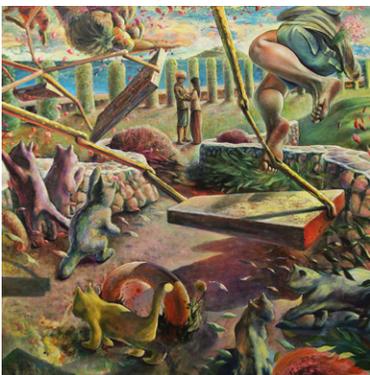
ています。だけどこのごろようやくエスキースの大事さが分かったところなんです。それまでは画面にぐちゃぐちゃと描いて「あ、こんなかたちがあるよな」とか「こんなふうなのが好きなだ」とか、ただ好き嫌いとか楽しいかどうかという基準で描いてきました。それが制作中に方向性がどんどん変わって大幅に内容が変わったりして、時間ももつたいなかったな、と改めて実感しているところなんです。

長谷川 佐藤さんは、自分でいろいろ試行錯誤しながら、こうして今ひとつの場所に行き着こうとしています。美術大学を出てないというハンデイクヤップを、広田さんという師匠に巡り会って、デッサンを繰り返すことで克服しています。

佐藤 いやそんな、まだまだです。
長谷川 デッサン力なしに空想だけで描くと、そこに構築は成り立たないように私は思いますね。だからそういう、自分の心情を描かれるなら、なおのことでしょう。中山先生、どうですか？
中山 おっしゃるとおり。特にこういう空想世界



《ヒーロー・9》 F10号 2013年
「横浜のアトリエで出会った小さなヒーローを、記憶を頼りに描きました」



《ヒーロー・2》 S30号 2012年
「友人が僕の《隠せない気持ち》を観て曲を作ってくれました。僕は彼の《hero》という曲に惹かれ、ヒーローを描きました。ヒーローシリーズのきっかけです」

長谷川 お話をうかがっていると、佐藤さんのいいところは、目の前に来たチャンスをやんと掴むことです。例えばシステイナの話を聞けばボンと行ってみるというように、常にそういう前向きな選択を採っていくところですね。
南 広田先生がいなくなつたらどうするの。いつかは巣立たない？
佐藤 それが怖いんです。（笑）

松村 君は独自にやっているといるよ。過去の作品を見て、ほんの1年くらいの間に凄いスピードでどんどん変わつていつてる。私は何年も前からいろんな若い画家の作品を見ているけど、君はいろんな意味でペースが速い。いきなりバチカンに行つちゃうしね。お金持ちであれば別だけど、金借りても行こうという勢いを感じる。スピリッツが違うね。

模範といつても、すべて物真似してわけじゃなくて、いいところだけを選んでやっているとだね。今うかがったところだと、広田さんといい人は、白日会の中でも特異に映るくらい、ものすごくデッサンを描くらしい。私は絵を描かないからわからないけれど、多分それはすごく大事なことだと思ふ。以前、絹谷幸二先生だったかな、や想像したモチーフを描いていこうとする場合こそ、デッサンの力がないと作品にならない。

長谷川 今日は、佐藤さんの今日に至るまでの流れをうかがえて、ちよつと安心しました。

松村 自分がいいと思つたらどんどん進むべきだというのは、美術の世界だけの話じゃないですよ。ビジネスの世界でも「才能があるから、君こうやってみたら」といくら言つても、ハイハイと返事ばかりで行動しない者がほとんどなんだよ。そこで琴線に触れたことを、そのとおりにパツと行動した人はそこから劇的に伸びる。自分がいいと思つたものを吸収してすぐにどんどんチャレンジできる、そういう判断力と行動力を併せ持った人っていうのは、そのプロセスの段階で自分を創つていけるんだと思うね。

中山 まだまだ柔軟性のある年齢ですから、これからどう変わっていくのか楽しみです。

佐藤 今回たくさんのお言葉をいただいたので、感謝の気持ちでいっぱいなんです。しっかりと心を磨いて精進致します。どうもありがとうございました。